

現代語版『小説神髓』(六)

はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強すべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思いますが、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、とくに、この本を読んでほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』の現代語訳をすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』(中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月)、岩波文庫『小説神髓』(宗像和重解説、二〇一〇年六月)に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『小説神髓』研究』(春秋社、昭和四一年)に詳しい

坪内 逍遙 著
坂井 健 訳

解説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本(松月堂、明治一八〇一年)を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本には、『逍遙選集』を底本として、初出との対照表がある。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髓』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

(第三) 正史の補遺となること

補遺とは何か。いわく、正史に漏れたできごとを補い、正し、正史

には細かく述べられない、当時の風俗、習慣などを、見ているように、絵に描いたようにとても精密に写し出して、一部の風俗史とすることをいうのである。だから、この利益は、もっぱら歴史小説(過去の小説)が占有するところであって、ほかの小説には、このことはない。そうはいっても、現代の小説であつても、後世の人からこれを見ると、過去の小説に他ならないから、どちらにしても小説には、この利益があることは争えないだろう。(たとえば、紫式部が物語つた源氏の君の物語は、まったくの現代小説だけれども、後世の人は、これによって当時の風俗、習慣を探り、物事の起源を知りようなものである。) こういうわけだから、小説の作者たるものは、つとめて人情を研究するかたわら、また、風俗にも目を向けて、かりにも荒唐無稽に類する時代ちがいの形容などは描き出してはいけないことであるよ。この利益については、西洋の物知りがおっしゃったことが、たくさんあるので、自分の言葉で議論するよりは、むしろ、それを二つ三つここに揚げて、それでこの利益があることの証拠としたい。

英国の小説大家、サー・ウオター・スコット翁^①がいうことには、歴史小説は二種の読者に利益を与えるものである。第一種の読者は、架空の物語を読んで、はじめて歴史の面白いものであることを知り、自然に小説が典拠とした正史の事実を知りたいと思つて、あらためて歴史小説をなげうつて、正史を読もうと心を傾けるものがこれである。第二の読者は、楽しみのためでなければ書物をひもとくことを好まず、過去にどんな事柄があつたかも知らず、ただ現代の事情だけを知つていたので、歴史小説を読むにおよんで、はじめて歴史の大略を知る

に至つたもの(かりにその知識は歴史の一部をうかがうにことにも足らないとしても、それでも、もともと何も無いよりは増えるだろう)がこれである、と言つた。

ヒュー・ミューラー^②もまた言つている。そもそも正史といつたものは、その体裁は厳格であつて、名称、年月が実に詳細で、事実もきわめて詳しいけれども、当時の人情、風俗などは、わずかに一部の表面だけを写して、その真の姿を描くことができない。歴史小説の人物、事績は、作者の意匠によつてできあがつているので、ちょうど戯作のようであるが、話に裏表や起伏があるので、かえつて、人情や風俗を映し出すのに便が多く、その頃の世の中のあるさまの本当の姿を写すことができる鏡といえるものが大変多いのである。歴史を学ぼうと思つている連中が、もし、我々の曾祖父の時代の様子を詳しく知ろうと望むならば、あのドズレイの年報^③をひもといて、無駄に時間を使うのは意味のないことである。むしろ、リチャードソン^④やフィールディング^⑤の歴史小説を読むべきである。その得るところはきつと少なくないだろう。ホーム^⑥は実際に一七四五年の反乱に巻き込まれて、自分の目撃したように、伝聞したこととを合わせて、一部の大歴史を書いたが、それでさえ、あのスコットのウェリバリー物語^⑦に述べてあるものにくらべるときは、その頃の様子を写していないことは、とても多い、云々と言つている。

サツカレー^⑧(英国の小説家)もまた言つている。私は、小説を読んでも得るところは非常に多い。その頃の世界のありさまを知り、時勢を知り、風俗を知り、衣服の流行を知り、娯楽、滑稽、遊戯の類が現代

とちがつている理由を知る。すでに死んだ人も再びよみがえり、すでに過ぎた世も再び戻ってきて、まるで昔のイギリス国に再び旅をするような感じがする。ああ、大家の正史でさえも、これ以上に役に立つことがあるだろうか云々と云ったことである。

このほかに正史小説の利益を説くものは、ほかにもたくさんあるけれども、要するに、大同小異であつて、これを風俗史であると見るに他ならないので、ここでははくだくだしくなるのを嫌つて、省き、後に、後に正史物語を論ずるときになつて、さらに論ずることもあるだろう。

(第四) 文学がお手本となること

お手本の利益とは、小説の文章上の利益である。優れた腕前で書かれた小説は、ただ、その趣向が優れていて、巧みであるだけではなく、その文章も、また、絶妙であつて、一句々々が非常に美しいので、文章を学ぼうとするものにとつて利益になることが少なくない。このことは、『源氏物語』や『水滸伝』を見ても分かることである。そもそも、文章といつたものは、思想を表す機械であるから、激越な思想を表そうと思つているときには、自然と激越な文章を用いないわけにいかない。優雅な思想を言い表そうとする望むときには、また、自然と優雅な文章を用いないわけにはいかない。あるいは、簡単な文章が必要な場合もあれば、長く説明する場合もあるだろう。臨機応変に、簡繁、強、柔、富、麗、純、樸、が適切に配されたものを、巧妙な文といふべきである。もし、そうでなくて、終始一貫して憂いの思い、苦

しい境涯を述べた文句も、楽しい思いを述べた文句も、その性質は全く同じであつて、すこしも違いがなかつたならば、その感情は、自然と移入されないので、読者も、また、感動しないだろう。たとえば、ひどく怒つたとき、または、大いに悲しんでいるときには、用いる言葉は簡略であつて、かつ、たくさんの修飾表現を吐くのである。修飾表現とは何か。いわく、比喩表現のことである。比喩表現といつたものは、西洋では、「フイギユアー、オブ、スピーチ」⁽⁹⁾と称して、文章の飾りともなり、省略とも、また、なるものである。その一例をあげていうなら、人をのしるときなどに「人でなしめ」といふべきところを、「畜生」といい「牛馬」というのは、その人が恥知らずなものを獣にたとえた比喩表現であつて、いわゆる修飾表現である。もし、普通のときであつたならば、「お前は、義理を知らないやつであるぞ。」と長くいふべきであるけれど、激しく怒つたときにあつては、心の中がすべて沸き返つて、言うこともやはり整わないので、自然と言葉も簡略であつて、ただ、「畜生」とか「人非人」とか一言二言だけ発言して、後は表情と身振りによつて、その意のあるところを表すことは、世の人は皆知つていふことであることだ。けれども、世間のことになれて、世の人情を知らないかぎりには、この理屈を知ることができないので、あの幼稚な小説家たちは、非常に文章はうまいのだが、なおかつ、巧緻の文章を書いて人を感動させることができない。むしろ、死んだ文章を書いて、自分の思うことの一部分をようやく表すことが多い。これは、しかしながら、どういふときにはどういふ性質の文章を必要とするか、どのような思想を表すには、どのような文体

がふさわしいかを会得していないことによるのであって、つまり、思想が文章に適応しないことに基づくものなのだ。そうはいっても、人間の感情思想は、もとより千差万別なので、いちいちこれに適することのできる文章を作るとは、きわめて難しい。めったにいない英才でないかぎりは、これこれの感情、思想は、これこれの文章によって表し、また、しかじかの趣には、しかじかの言葉を用いるのがよいと、字ばなければ知る方法もないので、必ずお手本を必要とするはずである。それなら、どのような文章を、まず、そのお手本とするののいいかと問うなら、先進の大家が書いた論文ばかりをお手本とするならば、いたずらに理屈に偏って、文章が淡泊にすぎるきらいがある。とはいっても、叙述文ばかり学ぶと、また、自然と緻密になりすぎて、活動の妙を損なうことがある。問答文ばかりを学ぶと、叙述に優れず、歴史文だけをお手本とすると、論評の文を書くことができない。思うに、一つの文章に偏るからであろう。千変万化の文章を用いて、千変万化の思いを表現するもの、これを完全な才筆という、とスペンサーの翁がおっしゃった。ただ一種類の文章に偏るものは(かりにその種類の文章は巧みであっても)完全な文章家とはいうことができない。かりにも文壇の大家でありたいと望むものは、千変万化きわまりない、美妙巧緻の文章によってそのお手本とし模範とし、それによってその文章を鍛えるべきである。百年、二百年の昔にあっては、ただ一種類の文章に巧みであれば、それでありたことであつたが、文化がどんだんだを追って進んで、今日この頃の世界となつては、いうべきことも、筆にするべきことも、非常に複雑になつたので、政治の弁論、評議で

さえ叙述体の文章を必要とすることがある。また、歴史文を必要とすることがある。あのパーク氏が議会でヘースチング氏を弾劾したときに叙述文体の演説によつて、議會すべての人々に感銘を与えたのは、よく人の知るところであることだ。

それなら、どのような文章をお手本としたらいいのかというと、千変万化きわまりない美妙巧緻のよい文章は、世にもまれな大家の手で書かれた小説の文章以上のものはない。思うに、小説といつたものは、千変万化の世のありさまを描写し、千変万化の情趣を写して、ほんの少しも漏れないのをその務めとするのであるから、ゆたかで美しい文もあり、強く荒々しい分もあり、あるいは、悲しみがしたり落ちるものもあり、あるいは、やさしくのどかなものもある。これまでのいきさつを述べるときには、歴史体の文章を用い、情景を語るときは叙述体の文章を用いる。問答の文があれば、論難の文もあり、諧謔の文もあれば、厳格な文もある。憤激しているもの、思想を言い表すには、これに適するはずの活発な言語を用い、愁いに沈んでいるもの、感情を言い表すには、これにふさわしいはずの悲しげな言葉を用いる。要するに文章と感情とが適応することを主とするので、求めなくても、その文体は千変万化極まりないことだろう。これが、小説が文章家のお手本となることのできる理由である。この論は、まだつくさないけれども、あまりに冗長にわたるので、しばらく筆をここに置いて、また、折をみて続けるつもりだ。(下巻の文体論と合わせ見よ。)

以上述べた議論は、すべて完全な小説についていつたことである。この頃流行している草双紙の類を論じたのではない。読者は、誤

って書き記して疑念を抱いてはいけない。

そもそも小説であつて、実にこのような利益があつたならば、わが国の未熟な小説や歴史小説を次第に修正改良して、あの西洋のものをも凌駕できる完全無欠のものにして、国家の花とたたえることのできる一大芸術としないことは、我々の大きな怠慢ではないか。そうはいつても、これを行いたいと思うならば、まず、先輩の成功した原因、失敗した理由を察し、同じ轍を踏む失敗に陥らないように努め、その勝れていた妙所を探つて、ますますこれを発展させ、完全無欠の素晴らしい歴史小説を編むことのできる手段を定めないうたならば、われわれ東洋の小説、歴史小説は、何年を過ぎるとしても、依然としてロマンスの地位にあつて、進歩することのできる好機はないだろう。

私は、学校を出てから、日がなおきわめて浅いので、心は著述にあるのだが、著述はもちろんのこと、翻訳でさえもしたことは、ごくごく少ない。こういうわけなので、私は実際の経験は、まったく乏しいけれども、長い間古今の歴史小説を読んで、理論上で得たことは、いささか少なくはないと思うので、かりに一片の小説法則の論を綴つて、これを下巻で述べて、世の参考にしたと思う。おこがましいとはかりお笑いにならないで、じっくりと味わつてお読みになることがあつたなら、小説という一大芸術が非常に難しい技術であることを、お知りになるだけではなく、わが国の草双紙が間もなく真正の小説、歴史小説となることのできる道を開く好機となるだろう。どうも、失礼いたしました。

〔注〕

- (1) サーク・ウオター・スコット翁・Walter Scott (一七七一〜一八三二) スコットランドの詩人、歴史小説家。歴史小説『アイヴアンホー』(一八二〇)で知られる。
- (2) ヒュー・ミユラー・Hugh Miller (一八〇二〜一八五二) スコットランドの地質学者、作家。
- (3) ドズレイの年報・ロンドン出版業者 James and Robert Dodsley が発刊した『Annual Register』その年に起つた歴史・政治・文学などについての重要な出来事を記録し分析したもの。
- (4) リチャードソン・Samuel Richardson (一六八九〜一七六一) イギリスの小説家。近代小説の父と言われる。書簡体小説の創始者とされる。
- (5) フィールドینگ・Henry Fielding (一七〇七〜一七五四) イギリスの劇作家、小説家。『トム・ジョーンズ』(Tom Jones)で知られる。
- (6) ホーム・John Home (一七二二〜一八〇八) スコットランドの牧師、作家。
- (7) ウェリバリー物語・Waverley (一八一四) スコットによつて書かれた歴史小説。西洋的な伝統の中で書かれた最初の歴史小説とされる。
- (8) サッカレー・William Makepeace Thackeray (一八一〜一八六三) イギリスの小説家。富裕層を風刺的に描いた『虚栄の市』(Vanity Fair (一八四七〜一八四八))で知られる。
- (9) フィギュアール、オブ、スピーチ・figure of speech・比喩表現。隠喩、暗喩など。
- (10) スペンサーの翁・Edmund Spenser (一五五二頃〜一五九九) アイルランドの詩人。『妖精の女王』で知られる。
- (11) バーク氏・Edmund Burke (一七二九〜一七九七) イギリスの哲学者、政治家、著述家。演説家としても名高い。
- (12) ヘースチングス氏・Waren Hastings (一七三二〜一八一八) イギリスの初代インド提督。一七八七年、不正行為で告発されるが、後、無罪となった。

現代語版『小説神髓』(六) (坂井 健)

(さかい たけし 日本文学科)

二〇一五年十一月十六日受理